

# ドクター田中のジャズ日記

~20~



レストラン「コンボ」を訪れたドラマのフィリー・ジョー・ジョーンズと久野次郎さん＝昭和39年ごろ

久野ちゃんには不慮な男だ  
った。おそろくアメリカ軍の  
キャンプで働いていた時に身  
につけたものだと思っけれ  
ど、とてもななくまい英語  
をしゃべった。何しろ自由に  
スラングをあやつるから、黒  
人たちとほまるで「ソウルフ  
ラザース」みたいにつき合う  
うな男ではなかった。あれは

ジャズ喫茶「コンボ」を始め  
てから二、三年たったころだ  
るか。白川公園のカマボコ  
型兵舎が撤去され、その跡地  
に新しいビルが建ちはじめ  
や、すぐさまその地下の一室  
を借り、当時としては、い  
や、たとえ今だっておそろし  
くさん新しいないレストラン  
「コンボ」をオープンして  
しまつたのだ。  
興行きのあるお店は、料理  
用のエビがおよきまわる水槽  
ターたちは見事にしつつけら  
れ、一流ホテルのレストラン  
以上の格式さえ感じさせた。  
そしてバンドスタンドには和  
田直のキタートリオがレギュ  
ラーでブルージーなジャズを  
演奏しているという具合で、  
客筋も喫茶「コンボ」とほか  
らりと変わって、背広姿の外  
人パイヤーやエリートビジネ  
スマンが中心となった。  
そんな時の久野ちゃんは、  
一変して見事なキングスイン  
フレットで、日本でも最もすばら  
しいジャズクラブとして紹  
介された。時もちょうど六〇  
年代に入り、しきりに来日す  
るようになった一流ジャズメ  
ンも、その評判を聞いて次々  
に訪れることになる。MJ  
Q、エリントンバンド、O・  
ピーターソン、スタンゲッ  
ツ、その他数え切れないほど  
のジャズ史に残るプレーヤー  
たちが、目の前でアフターア  
ワースならではのリラックス  
した上に、熱のこもったジャ  
ズを聴かせてくれる場となっ  
たのだ。(内田 修)

## 『コンボ』開店 米誌もほめる

で二つに仕切られ、入りばな  
の半分は白いテールクロス  
が目にしみる清潔なレストラ  
ン、奥まった半分は落ち着い  
たザロン風のつくりに仕上げ  
られていた。美しくカーブを  
描いた長いカウンター、ゆっ  
たりしたソファ、壁面を飾る  
和風のインテリア、でかいス  
テンレスの冷蔵庫。まるで突  
然映画の世界にでも入り込ん  
だみたいな雰囲気だった。  
フォーマルに決めたウエー  
グリスッシュでしゃれた会話を  
楽しむ風で、やつと僕にもあ  
のニヤリとした表情の意味が  
理解できたのだ。  
そんなある日、彼は言う。  
「ねえ、スタックパーティー  
をやりませんか」「えっ、そ  
れ何のこと?」「男だけのタ  
キシードパーティーですよ」  
そんなの持つてる訳ない  
よ。それに何だかキザっぽい  
気もするけどなあ。結局彼の  
熱心さにつられて新調させら  
れた僕らは、駅前にあつた  
「ホテルニューナゴヤ」の、  
階段つぎで吹き抜けの特別室  
を借り切つて、いきなシャン  
ペンパーティーなんか開いて  
しまつたりした。  
もっともこれだけの話なら  
久野ちゃんも、ちよっぴり気  
取つた新しがりやに過ぎなか  
つたかもしれないけれど、実  
はこうした時代を先取りする  
かのような突拍子もないやり  
方が、いつか必ず報われると  
鋭く見通していたんだねえ。